
僕と彼女のほのぼのだいありー

月飼い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女のほのぼのだいありー

【Nコード】

N7432H

【作者名】

月飼い

【あらすじ】

幼馴染の晴登と楓を中心に贈るほのぼのライフ。

#1：晴登と楓

夏休みも始まって2週間ほど過ぎた8月某日。

僕は自分の部屋で夏の暑さから逃れる為にクーラーをつけて涼しんでいた。

「やっぱり文明の機器って素晴らしいね」

これは僕の台詞ではないので独り言だとか思わないでほしい。今の発言は僕の幼馴染である志田 楓のものである。ちなみに僕の名前は錦戸 晴登だったりする。

「楓、どうでもいいけどどうして僕の部屋にいるの？」

「私の部屋のクーラーが壊れちゃったの」

「・・・昨日は普通に動いていたじゃないか」

「・・・とにかく壊れたの。だから、晴登の部屋に来たの」

「そっか」

どうせ何を言っても無駄なのは経験上良く分かっているので黙っておく事にする。生まれてからの付き合いは伊達じゃないのさ。

「伊達じゃないのさって格好つけてるね」

「楓、僕の心を読むのは止めてくれないか。プライバシーという言葉を知っているだろ？それから格好つけたつもりなんて全然ないから」

「別に勝手に読んだわけじゃないよ。読む前に心の中で晴登にちゃんと伝えたよ」

「次からは口にしたほうがいいよ。生憎、僕は読心術には長けてないんだ」

「簡単なものになあ。と言つても、私も晴登の心しか読めないけど」

どうしてピンポイントで僕のみなのは大いに気になるところだが、考えても答えは出ないに決まっているので幼馴染だからということにしておく。

便利な言葉だな。

「何が便利な言葉なの？」

「また読んだな。しかも中途半端な場所だけ。答えるのも面倒くさいから読むなら最初から全部読んでよ」

「じゃあ、これからはずっと晴登の心読んでるね」

「ごめんなさい。前言撤回です」

「ええ。男に二言はないんだよ」

「たまにはあるんだよ」

他愛もない日常。

この物語は僕と楓を中心としておくるほのぼのとした日常の話。

#1：晴登と楓（後書き）

作者の月飼いです。

読んでくれてありがとうございます。

こちらは、かなりゆったり更新になると思います。

気が向いたら書く程度でいくつもりなので。

一話を1000字以内に抑えるので簡単に読めると思います。

最後までお付き合いいただければ嬉しいです。

それでは。

#2：海へ行こう

「晴登、海に行こう。夏と言えば海だよ」

夏休みも残り一週間となったある日、相変わらずだらだらと部屋で過ごす僕に楓が元気な声でそう提案してきた。

夏と言えば海。その言葉にはとても納得できるが話があまりにも急すぎる。

「突然どうしたの？昨日までそんな素振り見せてなかったじゃないか」

「だって今行きたいって思ったもの。しょうがないでしょ」

「なるほどね、納得。で、肝心の海に行くかどうかだけど僕はパス」

「どうして？夏と言えば海だよ。つまり海に行かなくちゃ」

どういう思考回路で考えればそういう結果になるのだろうか？

「1人で行ってきたら？海は1人でも行けるんだし」

「駄目よ。1人で行ってもつまらないもの」

「じゃあ他の人を誘えばいいじゃないか」

「私は晴登と行きたいの」

よくもまあ、そんな恥ずかしい台詞を堂々と。いくら付き合いの長い幼馴染とはいえ顔が少し赤くなってしまふ。志田 楓ファンクラブの人たちが言われたら卒倒してしまうかもしれない。

「卒倒って何？」

「また人の心を。まあ、それは置いて海には行かないからね」

「……晴登……は、私と……遊びたく……ないの……？」

うつ。

とうとう出ちゃったか。楓の必殺技ともいえる泣き落とし。おそろくいつも通り嘘泣きではあると思うけど僕はこれに極端に弱い。

男は女の涙に弱いものなんだよ。

そんな事を格好つけながら言っていた友人を思い出してみる。

「分かったよ。海に行くから泣くのは止めてくれ」

「……本当？」

「うん、本当。海でも山でも川でもどこにでも連れて行ってくれ」

「山と川には行かないよ。それとも晴登行きたいの？」

「今のは忘れてくれ。それより、行くならさっさと準備して行こうよ」

「うん。善は急げってやつだね」

これが善なのかは疑問だが、そう言う事にして頷いておく。

「じゃあ私、準備してくる」

楓はそう言い残すと凄いスピードで僕の部屋を出て行った。うん、それはもうとてつもないスピードで。しかし、すぐに部屋の入口の方に戻って来てこう言った。

「ありがとね晴登。大好きだよ」

またそんな恥ずかしい台詞を堂々と。そう思わずにはいられない僕だった。

#2：海へ行こう（後書き）

どうも、月飼いです。

1000字以内だと書くのが楽ですね。

短くまとめる難しさはありますが。

これからもよろしくお願いします。

#3：ビーチの妖精

海は広いな大きな。

どこまでも続く綺麗に光輝く青色は僕にそんな事を思わせていた。

楓に半ば無理やりな形で海に連れてこられてけど、来て良かったなと思う。少し日差しがきついけどそんなの差し引いてもお釣りが大量に出る程に満足だ。

「それにしても遅いな。着替えるのに時間かかりすぎじゃないか」

一足先に水着に着替え終わった僕は既に砂浜に居て一刻も早く海に入りたいわけだけど。抜け駆けしたら後で楓に何を言われるかも分からない。男は時に我慢をしなきゃならんとか誰かが言っていた気もするし。

「晴登お待たせ」

結局、僕が来てから10分以上経ってから楓が現れた。当たり前な訳だけど水着であり僕が少しドキツとしたのは内緒の話。白を基調とした水着は楓に良く似合っていて海に来ている他の男の人も何人か見惚れているようだった。ファンクラブの人がいたらビーチの妖精とでも形容していたに違いないと思う。

「ほらボケっとしてないで海に入ろうよ」

楓はそう言っていると僕の手を握り僕はつられる様に走りだし海に向かっ

た。

足が海水に浸かると冷たさが伝わって来て気持ちよく感じた。2人でゆっくり歩いて行くと当たり前のように深くなりすぐに腰の辺りまでが海水に浸かった。

「気持ちいいね。来て良かったでしょ？」

素直に頷くのは悔しいけど……。

「うん、来て良かったよ」

「でしょ。やっぱり夏は海だもんね。あ、そうだ後で海の家にかき氷食べに行こうよ。海と言えば海の家でかき氷だよ」

「分かった。楓の好きな通りでいいよ。なんならスイカ割りもする？」

「スイカないよ」

なんか冷静に突っ込まれてしまった。ここは普通だったらいいね、やろうやろうとか言ってくれるような気がするんだけど。そりゃ確かにスイカはないけどさ……。

「晴登、向こうの岩場まで競争しようよ」

楓が突然そう提案するとある岩場の方を指差した。距離は約20mといったところ。フライングともいえる楓のスタート合図に僕は少し遅れてスタートして結局負けてしまった。

僕、水泳得意じゃないし……。

「私の勝ちだね。晴登もう少ししっかりしなきゃ」

「楓のスタートがフライングだったじゃないか」

「気にしないの。ほら今度はスタート地点がゴールね」

結局、この後何度かレースをさせられ見事全敗。

関係ないけどどうしてかき氷食べたら頭がキーンとするのかな？

#3：ピーチの妖精（後書き）

PV500、ユニーク250突破。

読んでくれている皆さん、ありがとうございます。

ゆっくりですが、よろしく願います。

#4：残された宿題

夏休みも残すところあと3日になった。

多くの人が残った宿題に苦戦を強いられている頃だと思う。僕の方はというと基本的に夏休み始まって10日以内に終わらせるので問題なかったりする。

しかし、僕の幼馴染は前者の方であり、毎年僕が手伝われるのが恒例となっている。

「ねえ晴登、この問題どう解くの？」

楓が何かを頼む時の少し甘ったるい様な声が僕の耳に届く。答えを教えてあげてもいいけど、それでは楓の為にならないので僕は心を鬼にする。

「自分で考えなきゃ。休み明けのテストで似たような問題も出ると思うしさ。少しくらいならヒント出すから頑張って」

「うう・・・、分かった」

返事をした楓は問題にもう1度目を向けてあれこれ考え始めたようだ。しかし一向に手が進まないところを見るとお手上げのように見える。楓のあの苦手な数学だから仕方ないかもしれないけど。

しょうがない、助け船を出してあげようかな。

「ここはさ、計算しやすいように代入を使えばいいんだよ。そうしたら文字が1つ消えてすっきりするでしょ」

「そっか。代入か、ありがとね晴登」

お礼を言うと楓は僕のヒントで何かを掴んだのかすぐに答えを導き

出した。次の問題も似たような形式の問題であり簡単に答えを出した。ちらっと僕が確認したところ、正解だったので楓は基本的に何でも出来るんだという事を改めて実感した。

「へえ、当たってるじゃん」

「本当？晴登の教え方が分かり易かったからだよ」

楓は笑顔でそう言ってくれるけど僕はちょっとヒントを出したただけ。特に役に立っていないような気もするけどそう言ってくれるんだし素直に喜んでおこう。

「晴登はさ、私なんかと違って頼りになるよね」

「そう？僕から言わせれば楓の方が頼りになるけどな」

「本当？」

「うん。そもそも僕が何の役に立ってるのかまったく見当がつかないんだ」

「色々だよ。晴登は優しいから」

「そう言ってもらえると嬉しいけど。いきなりどうしたの？」

「なんとなく言いたかっただけ。ありがとね、晴登」

「うん」

「じゃあ、さっそくだけどここ教えてくれない？」

ガラツと雰囲気を変えたかと思うとさっきとは違った種類の問題を指差して楓はそう言った。ちょっと雰囲気のにまれかけて簡単に答えを教えてしまいそうになったけど僕は再び心を鬼にした。

「晴登のケチ」

僕はケチじゃない。
多分……。

#4：残された宿題（後書き）

作者の月飼いです。

夏休みの終わりといえはある意味これですよね。

毎年、悩まされたものです。

歳を重ねることにやらなくなりましたが・・・。

それと、感想ありがとうございます。

とても励みになります。

これからも、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432h/>

僕と彼女のほのぼのだいありー

2010年12月12日14時21分発行